

往生浄土のさとり

元中央仏教学院講師 安藤光慈



道綽禪師が『安楽集』に、仏教には聖道の教えと往生浄土の教えとがあると示され、また法然聖人が「浄土宗」として専修念仏の教えを独立されたということは、お念仏の教えが一つの仏道体系として完成しているものであり、またそれは「浄土に往生する」ということにおいてさとりへ至る成仏道であることを示しています。それでは、私たちが浄土に往生して開くさとりとは、いったいどのようなものなのでしょうか。

親鸞聖人の『顕浄土真実教行証文類』もまた、「往生浄土」の成仏道の教・行そして証（さとり）ということをもとづいて顕かにされた書物であり、その「証文類」の冒頭には、浄土真実の証について、

つつしんで真実の証を顕さば、すなはちこれ利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり。……しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る。かならず滅度に至るはすなはちこれ常楽なり。常楽はすなはちこれ畢竟寂滅なり。寂滅はすなはちこれ無上涅槃なり。無上涅槃はすなはちこれ無為法身なり。無為法身はすなはちこれ実相なり。実相はすなはちこれ法性なり。法性はすなはちこれ真如なり。真如はすなはちこれ一如なり。しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応・化、種々の身を示し現じたまふなり。

（『註釈版聖典』307頁）

と説かれています。この内容をうかがうと、まず、御信心をいただいたなら、そのまま正定聚に住し、正定聚とは間違いなくさとりに至る仲間ということですから、浄土に往生すれば滅度に至ることが示されています。

さて、滅度に至ることが示された後はいわゆる転釈です。転釈とは、そのように展開していくということ、もしくは転釈に示されることがらを内容として持つということです。そして最後の一文で浄土真実の証についてしめくくられるのですから、「かならず滅度に至る」から「現じたまふなり」までがわたしたちのさとりの内容となります。しかし特に最後の一文には「弥陀如来」という言葉も出てまいりますし、「報・応・化、種々の身を示

し…」ともあって、少し検討が必要です。

そしてこの御自釈の後、念仏の衆生が間違いなく証果に至ることを示す引文が続きますが、その後往生浄土の教も行も信も証も如来より回向されたものであることが示され、さらに「還相回向」について述べられた次の御自釈が続きます。

二つに還相の回向といふは、すなはちこれ利他教化地の益なり。すなはちこれ必至補処の願（第二十二願）より出でたり。また一生補処の願と名づく。また還相回向の願と名づくべきなり。『註論』（論註）に願れたり。ゆゑに願文を出さず。『論の註』を披くべし。（同313頁）

「往相」が往生浄土の相状であるのに対し、「還相」とは還来穢国の相状ということですが、そのこともまた四十八願のうちの第二十二願によって如来より私たちに回向されているというのです。つまり、御信心をいただいたそのときに、浄土に往生することも、浄土より還来することもともに如来より回向されているということです。そしてその第二十二願とは、

たとひわれ仏を得たらんに、他方仏土の諸菩薩衆、わが国に來生して、究竟してかならず一生補処に至らん。その本願の自在の所化、衆生のためのゆゑに、弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊んで、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正真の道を立せしめんをば除く。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もししからずは、正覚を取らじ。（同19頁）

というのですが、この願に示されたはたらきを為す者のことを、「還相の菩薩」といいます。この箇所の親鸞聖人の訓みかたと通常の訓みかたととは異なっていると言われますが、いずれにしても「菩薩の行を修し」とありますから、この還相のはたらきを為すものを菩薩と示してあることは間違いありません。そして「証文類」はこの後のほとんどが、この「還相の菩薩」について明かされた曇鸞大師の『往生論註』の文の引用であり、その量は「証文類」全体の八割近くに及びます。ということは私たちの証果の内容は「還相の菩薩」とならせていただくということになります。

しかし、「往生即成仏」といわれることや、最初に引用しました「証文類」の冒頭の箇所に「利他円満の妙位、無上涅槃の極果」とあることから考えると、私たちは仏のさとりを得ていくように思われます。最初の問題も含めてこれらのことはどのように考えるべきなのでしょう。

浄土の菩薩というところで考えるなら、まず思い浮かぶのは阿弥陀如来の脇士である観世音菩薩と大勢至菩薩です。この二菩薩それぞれは阿弥陀如来の慈悲と智慧の徳をあらわす菩薩であると示されますが、どうして菩薩によって如来の徳をあらわす必要があるのでしょうか。しかし、菩薩によって如来の徳やたらぎがあらわされるのは、阿弥陀如来に限ったことではありません。おおよそ経典に示される如来はその左右に脇士の菩薩を従えて示され、それぞれの如来の徳があらわされていますし、また『華嚴経』の「入法界品」の内容はこれらの事情を象徴的に示しています。

『華嚴経』は常識を越えたような記述もあつて、説かれた直後には釈尊のすぐれた弟子である舎利弗や目連達の中にもその内容を理解できたものはいなかったともいわれる経典ですが、一方では、明治の頃に旧制高校の一年の学生であつた藤村操が人生をはかんで飛び込んだのが「華嚴の滝」であつたり、東海道五十三次が『華嚴経』に関係があると言ふことが以前からいわれられていたりして、馴染みの深い経典でもあります。

『華嚴経』は毘盧遮那仏のさとりを説いた経典です。しかし毘盧遮那仏はこの経典の中で一度も説法をしません。毘盧遮那仏は色も形もないのですから、説法することはしないのです。説法できないという方が分かりやすいかもしれません。そのため諸菩薩が入れかわり立ちかわり、仏にかわつて説法をしていきます。そして、『華嚴経』の最後にある「入法界品」という一章では、善財という少年（童子）が五十三人の先生（善知識）を次々とたずねていく物語が示されています。この五十三人の先生も仏ではなく、菩薩をはじめとして比丘や比丘尼、在家の女性信者、神々、国王、医者、少年少女などなど、実にバラエティに富んだ人物が登場して善財に道を示しています。この中には仏教からすれば外道と呼ばれる人たちもいますし、職業もバラバラで男女の区別もありません。この五十三人が東海道五十三次の由来になっているとも伝えられているのですが、その真偽のほどはともかくとして、まず最初に智慧を代表する文殊菩薩が登場し、最後に行を代表する普賢菩薩が登場します。このような説き方で、この善財童子の物語はそのまま菩薩の歩むべき道を示しているのです。

「入法界品」の中身についてこれ以上詳しく立ち入りすることはしませんが、大切なのは、ここに登場する善知識は菩薩やあるいは一般の人々ですけれども、しかし彼らはみな毘盧遮那仏のかわりに法を説き、善財はその

たらきの中に仏道を歩んでいくということです。つまり、善財は実に毘盧遮那仏のはたらきを真只中にあるのです。

毘盧遮那仏のように色もなく形もない仏を法身仏とといいます。お釈迦様は八十年の生涯を通して法を説かれましたが、法を發明したり作り上げたわけではありません。あえて表現すれば法を發見し説いていかれたのであって、『華嚴経』ではその法そのものこそ毘盧遮那仏なのです。『華嚴経』の「寂滅道場会」に、お釈迦様がさとりを開かれるやいなや毘盧遮那仏と一体になつていく様子が示されるのは、お釈迦様の説かれる法が世界全体を覆う真実の法であることを表しています。そして毘盧遮那仏は法そのものであるけれど、それが真実の法である以上、仏道を歩むものにはたらきかけていきます。「入法界品」に登場する五十三人の善知識達は、まさに毘盧遮那仏のはたらきそのものなのです。

さて、阿弥陀如来もまた「法身」として表されています。天親菩薩の『浄土論』には「真実智慧無為法身」とありますし、『往生論註』には「法性法身・方便法身」として示されています。このなか「方便法身」は、最初に引用した「証文類」の御自釈の「しかれば阿弥陀如来は如より来生して」と表されているところにあたります。つまり名を垂れ形を示した仏ということとです。『華嚴経』の「毘盧遮那仏」もまた、法そのものであるとはいっても、名前が無くてはそれを表現することができず、その法を示すことにはできませんから、「毘盧遮那仏」という名の法身仏として示してあるのです。一方阿弥陀如来も、私たちを導き、浄土へ往生させさとりに至らせる仏であることを知らせるために、自ら名のられているのです。

しかし阿弥陀仏について述べられた「真実智慧無為法身」や「法性法身・方便法身」の「法身」という言葉と、毘盧遮那仏が法身仏であると言われることとは少し意味が違ふかもしれません。「法身」という言葉には、毘盧遮那仏のように法そのものを指す場合があります。これは仏身を法身・報身・(広)化身等に分けて考えるなかの「法身」です。阿弥陀如来の場合、五劫思惟して四十八願を建立し、兆載永劫の行を修め、それに報いて仏と成られたのですから、通常は「報身」として説かれます。それから、「法・報・応」を含めた全体を「法身」と表す場合もあります。「真実智慧無為法身」の「法身」は通常三身説や四身説のうちの「法身」と考えられることが多いのですが、「智慧」は仏のはたらきを示し、一方「無為」とは「有為」

に対すると考えれば、この中の「法身」は「報・応・化」の全体のほたらきを示していると考えざるべきであり、またそれを承けて曇鸞大師は「法性法身・方便法身」の二身説を展開しているように思います。ともあれ、「証文類」に「しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応・化、種々の身を示し」とあることより考えれば、少なくとも阿弥陀如来のはたらきには、「応・化、種々の身を示す」ことが含まれています。そしてそれを含めた全体を阿弥陀如来のさとりというのです。当たり前のことなのですが、ただ「報・化、種々の身」について、それを直接に「阿弥陀如来」と表現することがないことには注意が必要です。

このことに留意しながら、浄土の莊嚴相について詳述した『浄土論』を讀むと、面白いことに気づきます。『浄土論』では浄土の莊嚴相を国土に関する十七種と仏に関する八種、そして菩薩に関する四種を挙げて、いわゆる三嚴二十九種莊嚴の浄土が説かれますが、浄土から他方世界に向けてのはたらきは、仏の莊嚴相において述べられるのではなく菩薩のはたらきとして述べられています。すなわち菩薩の四種の正修行功德成就として、最初に「一には一仏土において身動揺せずして十方に遍して、種々に応化して如美に修行し、つねに仏事をなす」（註釈版聖典七祖篇）37頁）と説かれ、さらに残りの三種はそのことをより具体的に、

…かの応化身、一切の時に前ならず後ならず、一心一念に大光明を放ちて、ことごとくよくあまねく十方世界に至りて衆生を教化す。種々に方便し修行し、なすところ一切衆生の苦を滅除するがゆゑなり。…
…かれ一切世界において余すことなく、諸仏の会の大衆を照らして余すことなく、廣大無量に諸仏如来の功德を供養し恭敬し讚歎す。…

…かれ十方一切世界の三宝なき処において、仏法僧宝の功德の大海を住持し莊嚴して、あまねく示して如実の修行を解らしむ。…
と示してあります。この浄土の菩薩は、もとより浄土に具わる莊嚴相なのですから、浄土のはたらきそのものを示しています。つまり、求道者としての菩薩ではなく、仏が実際に衆生教化に活動する相と理解すべきです。先に述べた觀世音菩薩と大勢至菩薩という阿弥陀如来の脇士も、仏が衆生教化すなわち利他のほたらきをなすことを表しているのです。また、大乘仏教において仏のはたらきは自利・利他の両面において説かれ、一方菩薩のはたらきほつまつばら利他の面で説かれていることを考えれば、浄土のは

たらきとして、その衆生教化のはたらきを菩薩において説かれることは、『華嚴経』を引き合いに出すまでもなく、むしろ当然のことといえます。浄土の菩薩は、如来の具体的な衆生教化のはたらきを示しているのです。

この菩薩の莊嚴相は、第二十二願に説かれる「還相の菩薩」のはたらきと内容的に同じです。私たちは浄土に往生しさを得させていたただく、そのことをもつと具体的にいうなら、「還相の菩薩」として阿弥陀如来の他方世界における具体的な利他活動をさせていたただくことに他なりません。それこそが私たちが仏となるということなのです。「証文類」の冒頭の文に「しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応・化、種々の身を示し現じたまふなり」とあったのは、私たちの証果が五劫思惟の願・兆載永劫の行に報いた「報」身たる阿弥陀如来と別にあるのではなく、また別のさとりではないことを示されていると考えられます。私たちはお念仏の中に阿弥陀如来の願と行とをいただいでいくのですから、そのさとりは阿弥陀如来と同じなのです。翻って考えれば阿弥陀如来と同じさとりを得ていなければ、菩薩として阿弥陀如来の具体的な利他活動を行うことができません。本来なら地獄一定の私が阿弥陀如来の摂取の光明につつまれて浄土に往生し、さとりへ至らせていただく、それは如来の具体的な利他活動を受けているということ。そして浄土に往生した私もまた阿弥陀如来のはたらきとして、すなわち還相の菩薩として有縁の人々を救いとる仏のはたらきをさせていただくのです。「仏となる」ということにおいて、これ以上の尊いことはありません。

親鸞聖人は師である法然聖人を讃えて、「阿弥陀如来化してこそ 本師源空としめけれ 化縁すでにつきぬれば 浄土にかへりたまひにき（『註釈版聖典』598頁）と詠まれています。親鸞聖人にとって法然聖人こそ、まさに浄土のはたらきを示しておられる方でした。そして、法然聖人のはたらきとともに、自分に向けられたさまさまざまな仏縁を還相の菩薩のはたらきとして感じ取られていたに違いありません。

私たちが手を合わせ、お念仏させていただくことも、懐かしい方々をはじめとして、さまさまざまな方が縁となり私にはたらいてくださるからに他なりません。それこそ私に向けられた還相の菩薩のはたらきであり、阿弥陀如来のはたらきです。そして私もまた浄土に往生したなら、還相の菩薩として阿弥陀如来の利他のほたらきをさせていただくのです。（真宗学）